

Title	韓国語名詞文の研究
Author(s)	許, 秀美
Citation	大阪大学, 2011, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58303
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

部]の対立をなしていることに着目し、そこを出発点として、この文法的対立が韓国語名詞文においていかにあらわれるかを、共時的・通時的に分析したものである。

日本語母語話者の韓国語作文によく観察される誤用として、日本語の「名詞+です」に対し「名詞+예요('yei'yo)」を当てた次のような例がある。

- | | |
|---------------|-------------------------------|
| [1] (日本語原文) | (韓国語訳) |
| 昨日何を食べましたか。 | 어제 뭐 먹었어요? |
| | 'ojei mue meg'ess'e'yo? |
| ビビンパです。 | *비빔밥이에요. |
| | bibimbab' i'ei'yo. |
| [2] (タクシーで) | (택시에서) |
| | (taigsi'eise) |
| どちらに行かれますか。 | 어디 가지겠어요? |
| | 'edi gasigeiss'e'yo? |
| 東大門運動場です。 | *동대문운동장이예요. |
| | dofdaimun' undofjaf' i'ei'yo. |
| [3] 誰に会いましたか? | 누굴 만났어요? |
| | nugur manness'e'yo? |
| 伯母さんです。 | *고모님이예요. |
| | gomonim' i'ei'yo. |
| [4] 何に乗りましたか? | 뭐 탔어요? |
| | mue tass'e'yo? |
| バスです。 | *버스예요. |
| | beseu' yei'yo. |

これらの文例において、それぞれの答えの文にあらわれる「名詞+예요('yei'yo)」は、日本語の「名詞+です」を直訳したものであるが、韓国語母語話者の内省に照らして不自然と判断される。次の例のように「名詞+요('yo)」を用いたほうが自然であると思われる。

- | | |
|---------------|--------------------------|
| [5] (日本語原文) | (韓国語訳) |
| 昨日何を食べましたか。 | 어제 뭐 먹었어요? |
| | 'ojei mue meg'ess'e'yo? |
| ビビンパです。 | 비빔밥요. |
| | bibimbab' yo. |
| [6] (タクシーで) | (택시에서) |
| | (taigsieise) |
| どちらに行かれますか。 | 어디 가지겠어요? |
| | 'edi gasigeiss'e'yo? |
| 東大門運動場です。 | 동대문운동장요. |
| | dofdaimun' undofjaf' yo. |
| [7] 誰に会いましたか? | 누굴 만났어요? |
| | nugur manness'e'yo? |
| 伯母さんです。 | 고모님요. |
| | gomonim' yo. |
| [8] 何に乗りましたか? | 뭐 탔어요? |
| | mue tass'e'yo? |

[18]

氏名	許秀美
博士の専攻分野の名称	博士(言語文化学)
学位記番号	第 24796 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語社会研究科言語社会専攻
学位論文名	韓国語名詞文の研究
論文審査委員	(主査) 教授 岸田 文隆 (副査) 教授 仁田 義雄 教授 杉村 博文 准教授 小西 敏夫 准教授 植田 晃次

論文内容の要旨

本論文は、現代韓国語の文法記述、その歴史的変遷、及び日本語母語話者に対する韓国語教育の観点から、韓国語名詞文の文末表現に関わる現象について研究したものである。すなわち、韓国語の해요(hai'yo)体に見られる二つの名詞文「名詞+예요('yei'yo)」と「名詞+요('yo)」が[述部:非述

バスです。

머سو,
beseu'yo.

本論文は、このような해요(hai'yo)体における二つの名詞文「名詞+예요('yei'yo)」と「名詞+요('yo)」の使い分けがいかなるものであるかを究明することを議論の出発点とし、前者と後者が[述部:非述部]の対立をなし、両者が相互排他的な文法的対立をなしていることを主張するとともに、そのような対立が韓国語の名詞文にどのように分布しているかについて考察した。各章において、議論した内容を略記すると、以下のとおりである。

第1章においては、本論文の目標、先行研究、行論に当たっての記述の枠組みについて述べた。

まず、第1.1節では、この論文の導入として、日本語「-です」を韓国語「-예요('yei'yo)」で直訳した誤訳の例文を提示し、해요(hai'yo)体の二つの名詞文、すなわち「名詞+예요('yei'yo)」と「名詞+요('yo)」の使い分けを明らかにすることを本論文の目標とすることを述べた。

第1.2節では、先行研究を検討し、既存の研究が形態素の次元で「名詞+예요('yei'yo)」と「名詞+요('yo)」をあつかってきたために、両者が互いに対立関係にあることを認識できなかったことを指摘した。

第1.3節では、この論文の基本概念になる文法的対立をなす単位について論じた。用言「있다('issda)」と「주다(juda)」を例に挙げ、活用表の一部に局部的に生ずる文法対立は形態素の次元では説明することができず、活用形全体をひとつの単位とみなさなければならないということを描した。

第2章においては、「名詞+예요('yei'yo)」と「名詞+요('yo)」の使い分けについて具体的に考察し、両者が文章の[述部:非述部]という対立をなすこと、すなわち名詞が述部の一部をなす場合には「名詞+예요('yei'yo)」の形をとり、名詞が非述部の一部をなす場合には「名詞+요('yo)」の形をとることを明らかにした。

第3章においては、[述語:非述語]の対立が名詞文의합쇼(habsyo)体にどのようにあらわれるのかについて考察した。합쇼(habsyo)体においては[述部:非述部]の対立が形態的にはあらわれず、名詞が述部の一部をなす場合にも、非述部の一部をなす場合にも、「名詞+입니다('ibnida)」が用いられることを指摘し、このことから、「名詞+예요('yei'yo)」と「名詞+요('yo)」の[述部:非述部]の対立による使い分けは、해요(hai'yo)体に局部的に生まれた文法対立と考えられること、すなわち、「名詞+예요('yei'yo)」が[述部]という意味をもつのは、形態素「-이다('ida)」を含んでいるということに起因するのではなく、「名詞+요('yo)」との機能分担によるものであることを論じた。さらに、합쇼(habsyo)体の名詞文の統語的現象を考察し、[述語:非述語]の対立は、たとえ形態上にはあらわれないものの、尊敬補助語幹「-시(-si)」や過去補助語幹「-었(-ess)」の挿入の可否など、統語的には異なるふるまいが観察されることを述べ、「述部:非述部」の対立が、形態的にはみとめられなくとも、統語的には名詞文(「이다('ida)」構文)全体に普遍的に存在する可能性を指摘した。

第4章においては、文末にあらわれる「-요('yo)」と、文中の各文節の末尾にあらわれる「-요('yo)」について、形式および意味の両面から検討し、両者を区別すべきであることを論じた。すなわち、形式面においては、文末の「-요('yo)」には一部の子音終わりの体言や副詞等の語の後にあらわれる「-이요('i'yo)」という異形態があるが、文中の文節末の「-요('yo)」にはそのような異形態がないというちがいがあること、また、意味面においては、文末の「-요('yo)」は「丁寧さ」のムードの意味をあらわすが、文中の文節末の「-요('yo)」は、「丁寧さ」よりもむしろ、「やわらかさ」のムードの意味をあらわすというちがいがあることから、両者を別個の文法形式とみなすべきであることを主張した。

第5章においては、名詞に後接する「-요('yo)」の文法的機能について検討し、はだかの名詞文との比較から、その機能は単に丁寧化を表示するものにとどまらず、名詞が非述部に含まれることを示すものであることを論じた。「-요('yo)」の後接しないはだかの名詞文の場合、名詞が非述部の一部をなす場合のみならず、述部の一部をなす場合にも用いることができるのに対し、名詞に「-요('yo)」が後接すれば、名詞が非述部の一部をなす場合には用いられるが、述部の一部をなす場合には用いることができない。すなわち、名詞が述部の一部をなす場合には、「名詞+예요('yei'yo)」を用いなければならない。このように、はだかの名詞文の場合にはない使用制限が、「-요('yo)」が後接した場

合には生じることから、「名詞+요('yo)」の「-요('yo)」の機能を基本的にことばを丁寧化しているだけの「丁寧化のマーカ」と見る野間(2006)の見解は首肯しがたいものであることを主張した。

第6章においては、第2章および第3章において構築した韓国語名詞文の[述部:非述部]の対立に関する仮説の妥当性を、現代語の実際の用例を資料として検証し、その仮説が実例に照らしても妥当であることを論じた。

第7章においては、해요(hai'yo)体の二つの名詞文「名詞+예요('yei'yo)」と「名詞+요('yo)」の使い分けが歴史的にいかなる変遷をたどったかを調査した。해요(hai'yo)体の使用が一般的になった20世紀初頭の資料(歴代文法体系および新聞)を中心に調べ、해요(hai'yo)体の名詞に後接する「-예요('yei'yo)」があらわれるのは、1915年頃であること、また、二つの名詞文「名詞+예요('yei'yo)」と「名詞+요('yo)」が用いられた用例が1925年の新聞記事に確認されるが、両者の使い分けは現代語に同じく[述部:非述部]の対立によるものと見られ、[述部:非述部]の文法的対立によるその使い分けは両形式の出現当初からすでに存在していたと考えられることを指摘した。

以上論じたところにより、韓国語の名詞文に해요(hai'yo)体を中心として[述部:非述部]の文法的対立が形態的・統語的に存在することが明らかになったが、かかる文法現象の明示的記述は、韓国語文法の記述的研究のみならず、そのような使用制限、区別を持たない日本語母語話者の韓国語教育にとっても有益なる情報を提供するものと信じられる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、現代韓国語の文法記述、その歴史の変遷、及び日本語母語話者に対する韓国語教育の観点から、韓国語名詞文の文末表現に関わる現象について研究したもので、韓国語の해요(hai'yo)体に見られる二つの名詞文「名詞+예요('yei'yo)」と「名詞+요('yo)」が、名詞が述部に含まれるか、それとも非述部に含まれるかという文法的対立をなしていることに着目し、そこを出発点として、この文法的対立が韓国語名詞文において共時的・通時的にいかんあらわれるかを分析したものである。

本論文全8章のうち第2章から第5章までの議論を通じて、해요(hai'yo)体に見られる[述部:非述部]の叙上の対立が합쇼(habsyo)体の名詞文には形態的には存在しないこと、にもかかわらず統語的ふるまいには両者の違いがあらわれること、해요(hai'yo)体において文末にあらわれる「-요('yo)」と文中の各文節の末尾にあらわれる「-요('yo)」は形式および意味の面から別個の文法形式と考えられること、はだかの名詞文との比較から名詞に後接する「-요('yo)」の文法的機能は単に丁寧化を表示するものにとどまらず名詞が非述部に含まれることを示すものであることなど、数々の興味深い新事実を報告している。

本論文第6章では、自身の構築した韓国語名詞文の[述部:非述部]の対立に関する仮説の妥当性を現代語コーパスを資料として検証して補強し、第7章では、해요(hai'yo)体の二つの名詞文「名詞+예요('yei'yo)」と「名詞+요('yo)」の使い分けが歴史的にいかなる変遷をたどったかを20世紀初頭の資料を中心に調べ、해요(hai'yo)体の二つの名詞文「名詞+예요('yei'yo)」と「名詞+요('yo)」の使い分けは、両者の出現当初からすでに存在したことを指摘している。

従来、韓国語の해요(hai'yo)体に見られる二つの名詞文「名詞+예요('yei'yo)」と「名詞+요('yo)」の[述部:非述部]の文法的対立についての分析は、形態素に拘泥した説明がおこなわれていたため、一般的に[述部:非述部]の文法的対立を持たない韓国語の名詞文にあってなぜ해요(hai'yo)体にこのような対立があらわれるのかについて明瞭な解答が得られていなかったが、本論文では、「名詞+예요('yei'yo)」と「名詞+요('yo)」がそれぞれかたまりとなり互いに対立しているという枠組みを設定することにより、この問題に対する説得力のある解答を提示することに成功したことは評価に値する。

審査委員会では、本論文の欠点・課題として、第6章・第7章の調査が不十分でさらに多くの資料に当たる必要がある、[非述部]という概念についてのさらにつこんだ議論が望まれる等の点が指摘された。

このような今後の努力にゆだねられる課題が存在するが、総じて、本論文を評価するに、本論文でおこなった韓国語名詞文の[述部:非述部]の対立についての明示的記述は、先駆的意義がみとめられ、学術的に高く評価される。また、その成果は、そのような使用制限、区別を持たない日本語母語話者

の韓国語教育にとっても有益なる情報を提供するものと判断される。よって、本委員会は、本論文が博士論文としてふさわしい貴重な学問的貢献であるという点で全員の見解が一致した。